

# News Letter

## Graduate School of Education



留学生交流会

<b>巻頭言</b>	2	<b>令和5年度教育学研究科長賞</b>	7
南部 広孝 副研究科長		受賞者 櫃割 仁平 博士後期課程3回生	
<b>研究ノート</b>	3	<b>事務室から</b>	8
[教員から] 畑中 千紘 臨床心理講座 准教授		平野 彰人 事務長	
[院生から] 加藤 結芽 博士後期課程2回生		辻 幸代 教職教務掛長	
[社会人院生から] 野村 悟 修士課程1回生		<b>オープンキャンパス2023</b>	9
[留学生から] 蔣 天晨 修士課程1回生		大学院・学部学士入学 入試説明会	
<b>活動報告</b>	5	<b>諸記録</b>	10
[附属臨床教育実践研究センターから]		主な出来事 (2023.4.1 ~ 2023.10.31)	
松下 姫歌 附属臨床教育実践研究センター長		人事異動 (2023.5.1 ~ 2023.10.31)	
[教育実践コラボレーション・センターから]		外部資金受入れ (2023.4.1 ~ 2023.9.30)	
西岡 加名恵 教育実践コラボレーション・センター長		<b>諸報</b>	11
[グローバル教育展開オフィスから]		新任教員紹介	
南部 広孝 グローバル教育展開オフィス長		<b>教育学研究科・教育学部基金</b>	12
<b>E.FORUMの取り組み</b>	6		
奥村 好美 教育・人間科学講座 准教授			



### 京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

# 教育学研究科70周年を迎えて

副研究科長 南部 広孝

教育学研究科は1953(昭和28)年4月1日に設置され、同年5月15日には第1回の新制大学院修士課程入学生宣誓式が行われて教育学研究科修士課程に6名が入学しました。そこから数えますと、今年2023年は本研究科の創設から70周年を迎えたこととなります。それだけではありません。この70年間を振り返れば、創設時に置かれた2つの専攻(教育学専攻、教育方法学専攻)に加えて臨床教育学専攻が設置されたのは1988(昭和63)年度で今から35年前のことでしたし、いわゆる大学院重点化が行われて従来の3専攻が教育科学専攻、臨床教育学専攻の2専攻に再編されたのは1998(平成10)年度で、今年で25年になります。さらには、教育学環専攻の1専攻制として講座を再編成するとともに学生の所属としてコースを置くという大きな組織改革が行われたのは2018(平成30)年度で、それから5年が過ぎました。こうした組織の見直しが5年、10年といった区切りを意識して行われたわけではないでしょうが、今年は、研究科で形を変える大きな改革が行われてからのこうした節目が重なっています。

教育学研究科の創設は必ずしも順調ではなかったようです。『京都大学百年史』を紐解くと、次のような記述に行き当たります。「新制度の京都大学大学院のあり方を検討する大学制度委員会の当初案では、教育学部には独自の大学院は認めず、教育学研究科は、当分の間、文学研究科に併置されるようになっていた。しかし、教育学部教授会は、もともと学部創設の基本方針として大学院コースに重点を置くことを謳っており、また学部の性格や自立の面から言っても、独自の大学院を持つことが大切であると再確認し、関係者が学内外の理解と協力を求めるとともに、積極的に文部省との折衝に当たった。その結果、1953(昭和28)年4月1日から他の大学院研究科と並んで、教育学研究科を発足させることができるようになったのである」(『京都大学百年史 部局史編1』186頁)。ここで「学部創設の基本方針」と言われているのは、1950(昭和25)年6月に教育学部整備委員会から出された「教育学部整備要綱」に、「教育学部全般の方針」として「教育学部学生の数を少く採り、全学学生の教職につくための科目、卒業生のための大学院コース、現職教員再教育に重点を置く」とある(『京都大学教育学部四十年記念誌』315頁)ことをふまえていると考えられます。

このように、教育学部創設の当初から大学院教育に重点を置くことになっていましたが、それは1998(平成10)年度の大学院重点化によって具体的に制度化されることになりました。すなわち、基礎となる教育研究組織が学部から大学院(研究科)に移って教員は大学院(研究科)所属となり、また



その際、大学院の定員充足率を維持すること、博士の学位取得率を向上させることが求められました。その結果、修士課程の入学者で見れば、1年あたりの入学者数は、1997(平成9)年度までの45年間で17.4名だったのに対して、1998(平成10)年度以降の25年間では40.8名と2.3倍になっています。また、博士学位の授与数では、1997(平成9)年度までの授与数の累計が90だったのに対して、2022(令和4)年度末時点ではそれが464に達していて、1998(平成10)年度から2022(令和4)年度までの25年間で374、年平均で15.0の博士学位が授与されています。とりわけ、いわゆる課程博士は、1997(平成9)年度まででわずか15しか授与されていませんでしたが、1998(平成10)年度以降の25年間で271、年平均で10.8が授与されています。以前より学生定員も教員の数も増えていきますので、単純に比べることは難しいですが、それでもこの25年間、大学院の規模が大きく拡大し、制度化が進められて、教育研究をいっそう活発に展開するとともに多くの修了者を社会に送り出してきたことは確かです。あわせてこの間、社会人を主たる募集対象とするコース(プログラム)を設置したり、臨床心理士の養成に関わる専門家を養成するプログラムを設けたり、教育研究の国際化の進展を図ったりと、提供する教育の多様化も進んできました。

教育学研究科は70年間に組織の形を変えてきましたが、当然のことながらそこには連続性があります。歴史の層をいくつも重ね、それぞれの時期に教員と学生が精力的に活動を行うことで、今日まで教育研究の豊かな成果をあげてきました。70周年を迎えて円熟味を増す研究科は、そうした成果の厚みを土壌として、大学院重点化から25年を過ぎていますますます飛躍し、最新の組織改革から5年を終えていよいよ大きく歩み出すこととなります。どうぞご期待ください。

## 教員から

### わかりやすさと、わからない心



臨床心理学講座  
准教授

畑中 千紘

数年前、3名の教員で担当する一般教養の授業に、担当教員の一人として参加していた。その日はその分野の第一人者の教授の担当で、専門的に見ても非常に興味深い講義が行われていた。ところが、その日の学生の感想コメントに「よくわからなかった。もっとわかりやすく話すべき」とあり、筆者は衝撃を受けた。大学の講義なのだから、一般教養といってもそれなりの専門性を含んだ話と

なることが多く、学生からするとわからない部分があるのも当然である。しかしそれについて「わかりやすく話すべき」だと考える発想はあまりにも斬新だった。一方で、同様の傾向は社会全体にみられる。ありとあらゆるジャンルのわかりやすい解説動画が再生数を稼いでいるように、個人が難しい課題に時

間をかけて取り組むような機会は少なくなった。確かに現代人は忙しく、いちいち難解な哲学書を読んでいる暇などない、情報はわかりやすく提供してくれといった感覚が「普通」なのかもしれない。

このような流れの中で、研究成果を公開する際に、どこまでわかりやすく単純な形に落とし込むのかと迷うことが増えた。心の深い層にかかわる臨床領域においては、単純には割り切れない現象がほとんどだ。たとえば、心理療法のプロセスで改善に向かう際、「一旦症状が悪くなる」といったようなネガティブな動きが起こることが重要であるということが統計的にも明らかになった。しかし、当然のことながらこの結果は「悪くなった後に必ずよくなる」と法則化できるものではない。「そういうこともあればそうでないこともある」というのが心の常なのであるが、そのような曖昧な説明は世の中から忌避される。心の研究をする上で、人間の「わかりきれない」側面をどのように共有していくかがこれからの課題だと感じている。

## 院生から

### 成功・失敗とは



臨床心理学講座  
博士後期課程2回生

加藤 結芽

私は、現在、京都大学大学院の博士後期課程に所属している。そう言えば、「すごい」「成功している」と言われるだろうか。肩書きから一面的に言えばそうなのかもしれない。しかし、この事実が私の人生が成功ばかりであることを意味するのかというと、決してそうではない。多くの失敗を経験してきたし、重要な局面で不合格、不採用、不採択になってきた。これらの結果により、失ってきた機

会や経験は多い。一方で、京都大学に合格している。そう言ってしまうと、「それならいいじゃん」という話なのだろうか。

そもそも、何が「成功」であり、何が「失敗」であるのか。それは客観的には明らかなのかもしれないが、その人にとって、その人の人生という大きなストーリーにおいて、成功なのか失敗なのかということは、一概に言うことはできない。私の専門

は、臨床心理学である。心理臨床の場においては、客観的事実を無視するわけではもちろんないが、当人が主観的にどのように感じているのかが大事にされる。たとえば、客観的事実として「不合格」という結果が与えられたとしても、それが「失敗」と同義であるかは、その人の意味づけ次第である。

つまり、肩書きや所有物がその人の全てではない。高学歴であれば幸せであるかということ、必ずしもそうではないし、失敗を重ねている人が不幸せであるかということ、そうとも限らないだろう。やはり大切なのは、人との繋がりなのではないだろうか。もちろん、最低限の知識・お金は必要である。しかし、どれだけ学歴やお金があっても、人の温かみには代えることができない。私の研究テーマは、青年期の重要な他者との関係におけるアタッチメントである。青年が親から離れ、親に代わる重要な存在とどのように関係を築いていくのかということに関心がある。客観的事実だけではなく、その裏にある「こころ」、その人のストーリーに歩み寄りることのできる心理臨床家・研究者でありたい。

## 社会人院生から

### 見るということ



臨床教育学講座  
修士課程1回生  
野村 悟

時折、大学構内で見学中の制服姿の高校生を見かける。その光景を目にすると身体の奥底に潜んでいた様々な感情が浮上する。公立高校で勤務してきた私にとって、常に10代の高校生が周囲に存在していた。それが私の日常であったからである。今、その日常を離れて、大学院という空間の中に身体を置いていると、それまで自分が見えていなかった幾つもの事象に気づかされる。教育現場に塗れていると、どうしても近視眼的なものへの捉え方、(それはむしろ自然の流れなのだろうが)、眼前の生徒の対応に追われ右往左往させられることが多い。当然のことながら、現場において完璧な教育などない。問題対応一つにおいても、生徒一人ひとりの置かれた状況は全く異なってくるからである。だから問題の本質を見極め、最善の方法を選択するには時間と労力を要する。

今、京都大学大学院教育学研究科というこの場所で、その眼前性とはまた別な角度で、なおかつ理論的な枠組みでものごとを捉える機会が巡ってきたことは、この上なく尊いことだと感じている。黒板を背にして立っていた自分の立ち位置が回転し、黒板を見る側において、その際は見えていると思っていたはずのことが、鏡の中の鏡のように見えるからである。

社会の中で培ってきた自分自身の学校教育への思考を定義し直していくところが、実社会に身を置き、再び学を得るという意味なのであろう。現実的なところは、授業や演習で手一杯のところもあるのだが、それでも先生や周囲の仲間にも助けられながらも尚、新たな視点を投げかけてくれる環境に感謝したいと考えている。昨今、公立学校教員の勤務問題等を報じた様々なメディアを目にするが、複雑な感情を抱くのと同時に、教育において新たな展望を見出せるのではないかと期待を抱けるということが、私のような実践者が大学院で再び学び、研究する意義なのかも知れない。教育学研究科は、そうした気づきを与えてくれる学びの場である。

## 留学生から

### 日本の研究を先行として、中国の研究を行う



教育社会学講座  
修士課程1回生  
蒋 天晨

私は京都大学で研究生として1年間傍聴し、外国人留学生特別入試に合格して院生になりました。おそらく、これから教育学研究科に進学される外国人院生も同様のプロセス踏むことでしょう。私はこの制度を非常に良いものと考えています。なぜなら、研究生の期間中に自由に使える時間がたっぷりあるからです。去年の夏休みにゼミ合宿に参加しました。中国では「合宿」のようなものはあまりないため、とてもおもしろいと感じました。合宿中には4回生の発表を聞いたり、少年院を見学したりして、いろいろ勉強になり、すばらしい体験でした。さらに、研究の観点から考えると、多くの文献を読むことができ、自分の興味や関心を発見する機会があります。私は特に「いじめ」に興味を持ち、それを研究のテーマとし、いじめの構築主義的な研究を行いたいと考え

ています。

日本においていじめが社会問題として認識されたのは1980年代と言われていますが、中国では約20年遅れて1999年にいじめに関する調査が始まりました。ここで注意すべきなのは、研究が始まった時期だけでなく、「社会問題」という用語です。つまり、中国ではいじめがこれまで社会問題として認識されておらず、構築主義に関する研究が不足しているということです。したがって、私は構築主義に基づく研究を行い、中国のいじめ研究の不足を埋めたいと思っています。

課題に取り組むためには、まず先行研究を収集することが必要です。中国と比較して、日本では構築主義の研究が盛んです。したがって、日本や他の国の先行研究を十分に参考にし、自分の研究の基盤として活用します(中国ではいじめに関する構築主義的な先行研究がほとんど存在しないため)。もちろん、語彙の使用や概念の整理など、さまざまな難しさが存在しますが、これが日本に留学してきた目的の一つであり、楽しみの一部でもあると思います。

## 附属臨床教育実践研究センターから

### 附属臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター長  
松下 姫歌



臨床教育実践研究センターは、今年度、新たに、畑中千紘准教授と水野鮎子特定助教をスタッフとして迎えました。センターとして、フレッシュな人材を得て、現代的課題に関する本質的なアプローチの推進にこれまで以上に取り組んで参りたいと思います。

当センターは、心理教育相談室での相談者一人一人への真摯かつ丁寧な心理臨床実践と、実践的営みを通じて初めて見えてくる問題理解の視点やアプローチに関する教育・研究および知見の発信に取り組んでいます。

今年度は7月に第25回リカレント教育講座を開催しました。午前の部では「現代の子どもをめぐる“暴力”」をテーマに、京都府総合教育センターの村瀬敏則先生とあいち発達障害者支援センターの小松正明先生をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話いただきました。午後の部では分科会形式で事例研究を行いました。学校教諭や臨床心理士の多くの先生方の参加を得て、活発な議論を通じて重要な観点の発掘と共有

がなされました。

また9月には国際箱庭療法学会前会長のアレクサンダー・エスター・ホイゼン先生を外国人客員教授として3か月間招聘し、分析心理学における自我と自己、箱庭療法の本質的理解とアプローチについて、大学院生の教育研究に携わって頂いています。11月には「手で夢見ること—トラウマ治療において、箱庭療法はどのように作用するのか—」と題した公開講座の開催を予定しており、すでに多くの方から申込みを頂いています。

東日本大震災以降、当センター内に「こころの支援室」を開設し、関西圏に震災関連で避難・移住された子育て世帯への支援活動を行ってきました。2020年以降はCOVID-19の影響により活動を休止せざるを得ない状況が続きましたが、震災から時間が経つにつれ、当事者の方々が抱えておられる困難の性質も個別化しつつあると推測されます。当事者の現在のニーズを丁寧に探りながら、今後の活動のあり方を検討していきたいと考えております。

## 教育実践コラボレーション・センターから

### 研究科内外の連携を促進する

教育実践コラボレーション・センター長  
西岡 加名恵



教育実践コラボレーション・センターでは、教育学研究科内外の異分野連携・融合を促進し、様々な教育課題に対する組織的な対応をコーディネートすることを目的として、各種の活動に取り組んでいます。

継続的に開催してきた「知的コラボの会」は、ついに50回を超えました。新しく研究科に着任された先生方に話題提供をいただいているほか、外部の講師を招いた講演会などとして開催しており、毎回、知的刺激に満ちた会となっています。

2023年5月31日～6月6日にかけては、グローバル教育展開オフィスと当センターの共催として、第24回教育学研究科セミナー「分野横断型意見交換会」を開催しました。その中で、本研究科の強みは、教育について多角的なアプローチを採用しつつ、本質的な概念を根本的に問い直すような研究を進めている点にあるということが改めて確認されました。一方で、本研究科が進めるべきカリキュラム改善などに関する意見も出されました。これらの意見についてはリスト化して教授会でも共有し、今後の改

善にもつなげる方向で、現在も検討を続けています。

また当センターのユニットであるE.FORUMでは、大阪市立生野南小学校で開発された「『生きる』教育」に注目し、昨年度より連続研究会を開催しています。「『生きる』教育」は、子どもたちへの虐待予防やトラウマへの治療的アプローチを含むプログラムです。連続研究会には第5回までに、延べ240名を超える教職員や子ども支援に携わる方々にご参加いただいています。

その他、日本学術会議心理学・教育学委員会排除・包摂と教育分科会、並びに日本教育学会近畿地区の主催による今井むつみ氏の講演会「算数学力不振の理由——認知科学の観点から」をE.FORUMとの共催としたり、秋田県立湯沢高等学校主催のイベント「高校におけるデータサイエンス×探究を考える」を後援して大学生と高校生との交流機会を設けたりするなど、学外との各種の連携も推進しています。

詳細については、当センターのウェブページをご覧ください。



## コロナ禍後の新たな船出

グローバル教育展開オフィス長  
南部 広孝



今年4月よりグローバル教育展開オフィス長を務めています。就任してすでに半年余りが過ぎていますが、どうぞよろしく願いいたします。

本オフィスは2017年4月に設置され、これまで高山敬太教授・オフィス長を中心に、学術領域の創出及び次世代の教育研究・教育実践を担う人材の養成を目的として、グローバル化や国際化の観点からさまざまな活動を展開してきました。しかしながら、設置から6年を経て今年度、オフィス長を含めてスタッフが全面的に入れ替わりました。8月には張潔麗助教を迎え、新体制での船出を切っています。

本オフィスでは今年度も教育研究の成果の国内外への発信や、大学院学生への国際学会参加や論文投稿に対する支援、グローバル教育科目の提供などを実施しています。このうち大学院学生への国際学会参加支援は、コロナ禍での海外渡航制限がようやく緩和されたこともあり、今年度特に力を入れています。10月時点ですでに昨年度の2倍を超える17名の学生

が国際学会で発表を行いました。

また、初めての取り組みとして、7月27日に留学生交流会を開催しました。留学生がどのような期待や希望をもって教育学研究科・教育学部を選んだのか、学習や生活の中でどんなことに困っているのかなどを直接聞いてみようと考えて企画したものです。当日は、留学生を対象に実施した事前アンケートの結果を佐藤万知准教授から紹介いただいた後、グループディスカッションを行いました。22名の留学生をはじめ日本人及び外国人の留学生チューターや教職員などあわせて36名の参加者により意見交換が活発に行われ、留学生からは①英語による情報発信、②アカデミックライティングへの支援、③チューターの充実などの希望が出されました。

本オフィスはこのように研究科・学部の「内なる国際化」にも目を向けながら、多様な取り組みをひき続き推進してまいります。今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## E.FORUMの取り組み

### 2023年度E.FORUM 「全国スクールリーダー育成研修」の取り組み

教育・人間科学講座 准教授  
奥村 好美

E.FORUMでは、2023年8月18日(金)・19日(土)に、吉田キャンパス文学部新館ならびに法経済学部本館にて「全国スクールリーダー育成研修」を開催しました。2日間に渡る対面での研修は、4年ぶりの開催でしたが、北は北海道から南は熊本県まで、総勢143名(1日目:127名、2日目:78名)の教職員や教育委員会関係者等の方々にご参加くださり、とても活気のある会となりました。

1日目の午前は、分科会A「『資質・能力』を育成するパフォーマンス評価——教科教育を中心に」(西岡加名恵教授)と分科会B「授業づくりの深め方」(石井英真准教授)、午後の前半は、分科会C「批判的思考の能力と態度を育てる——よりよい未来を築くために」(楠見孝教授)と分科会D「カウンセラーからみた不登校」(梅村高太郎講師)に分かれて講義を行いました。午後の後半は、齊藤智研究科長による挨拶の後、明和政子教授による講演「ヒトの脳と心(人間らしさ)の創発・発達」を行いました。

2日目は、午前に分科会E「個別化・個性化教育の考え方——オランダのイェナプラン教育を手がかりに」(奥村好美准教授)と分科会

F「教員の育成策を考える——外国の事例との比較を手がかりに」(服部憲児教授)に分かれて講義を行いました。午後は、参加者からの質問にお答えする「質疑応答セッション」(西岡加名恵教授・石井英真准教授・奥村好美准教授)を行った後、参加者それぞれの興味関心に沿って、グループごとに実践交流会を行いました。グループでは、参加者それぞれが持ち寄った実践資料をもとに参加者同士で意見交換を行い、交流を深めました。

E.FORUMでは、引き続き実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしく願いいたします。

E.FORUMの活動については、

<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>をご覧ください。



# 令和5年度教育学研究科長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長  
齊藤 智

このたび、令和5年度京都大学大学院教育学研究科長賞の選考の結果、教育学環専攻教育認知心理学コース博士後期課程3年の櫃割仁平（ひつわり じんぺい）さんが、受賞者に選ばれました。誠にありがとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生であればだれでも推薦することができます。自薦も可能となっています。

12回目を迎えた今年度は、推薦期日の令和5年9月29日までに、計1名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会（委員は齊藤智研究科長、西岡加名恵副研究科長、南部広孝副研究科長、服部憲児教務委員長、佐野真由子学生委員長）において、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、櫃割さんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、研究科長賞受賞者として決定しました。

櫃割さんは、俳句の鑑賞過程において生じる審美性に関心を持ち、実験室実験、質問紙調査、ならびに脳機能画像化法などの多様な手法を学び、研究に取り組んできました。従来視覚芸術の曖昧性が審美性に寄与することが示されてきたものの、言語芸術におけるこれらの関連性の詳細は不明でした。櫃割さんは言語芸術のうち、とくには俳句に備わる「曖昧性」に着眼し、その多様な曖昧性を分解し、各々の要素からの新たな説明を果敢に試みており、その研究課題のチャレンジ性は、独創性に秀でており高く評価できます。その研究成果として、国際学術雑誌に審査を経て5編の論文を発表しており、卓越した研究成果を挙げてきました。また、国内において日本感情心理学会第31回大会・若手優秀発表賞も授与されています。

以上のような学業成果と学術活動を通じ、学業分野において、本研究科の名誉を高めることに大いに貢献されました。

今回の受賞を機に、今後ますますご活躍されますようお祈りいたします。



博士後期課程3年生 櫃割 仁平

この度、教育学研究科長賞という名誉ある賞を頂き、大変光栄に思っております。ご指導頂いている先生方、院生の皆さん、そして事務の方々を含め、関わって頂いた全ての方々に感謝申し上げます。私は、教育学研究科に来てからの5年間、俳句という世界最短の詩を題材に「美しい」と感じる人の心を研究してきました。物理学の世界で、原子、原子核、陽子、クォーク、など対象を細かく解剖していくことで、真理に近づいてきたように、美や芸術の分野も小さい世界を探索し、そこに潜む核心を捉えたいと考えました。特に、曖昧性という観点から、曖昧性が減少した時に美を感じる「曖昧性の解消」やドイツ人との文化差などを明らかにしてきました。私は、大学院からここに来ました。当初自分の身に余る（そして時に付いていけない）高度な環境でしたが、先生方、院生の皆さんに引っ張って頂き、ここまで研究をすることができました。また、泣き言にも近い相談ごとを優しく受け入れてくださった事務の方々が居なければ、ここまで充実した院生生活を送っていなかったと確信しています。本当にありがとうございました。これからもいい報告ができるように精進して参ります。

## 日々雑感

事務長  
平野 彰人

本年4月、地球環境学堂事務長より教育学研究科に着任いたしました事務長の平野です。あっという間に半年が過ぎました。月日が経つのは早いものだと感ずる今日この頃です。

型苦しい挨拶はここまでとして、私からは趣味の一つであるランニングについて少し語りたいと思います。

私は年に2回のフルマラソン (PB3 : 39)、同3回のハーフマラソン (PB1 : 40) 出走を目的としたトレーニングの位置づけで日々ランニングをしています。よく人から「なぜそんなしんどいことをしているのか?」と聞かれます。実は、本人もその明確な回答を持っておりません。元来長距離、短距離、走ること自体が苦手なはずの私が老体にムチを打って走っている、という現状は自分でも不思議なことなのです。

走り出したきっかけ、もしくは動機は何点かあります。50歳になった記念に何となく応募した京都マラソンに当選してしまったことや健康(ダイエット)のため、などが一般的に理解されやすいことだと思います

が、実は以前から山中教授や企業のエグゼクティブがフルマラソンに挑戦している意味を知りたくて、身をもって体験することによりその深層に触れたかった、というのが大きな理由の一つです。

では、ランニングを始めてから何か良いことがあったのか、という点ですが、一言でいえば「スッキリ」します。私は土日に自宅と京都市内北部のとある神社を往復していますが、往路は物事に悩み、熟考する区間、復路は落ち着き・整理・ベクトルを定める区間となり、最後に「スッキリ」がやってきます。もちろん週末1往復で、悩みや諸問題が全て解決するような魔法があるわけでもなく、現実には現実として都合よく消えてくれるわけではありません。ただ、そんな行動を基本的に毎週繰り返すうちに、時は過ぎ、物事はゆっくりと前に進んでいきます。タイムを競うこともモチベーションですが、私はこの「スッキリ」を得るため、これからは走っていくのだと思います。

## Legend(レジェンド)の伝説

教職教務掛長  
辻 幸代

世の中で名人・達人と呼ばれる人の匠の技には感嘆・感動・感激があります。それは、そんな技アツアツ、そんな人イタイタとなり、やがて各界のlegendと呼ばれ逸話は伝説となります。将棋の世界は元よりその道の名人・達人は多く、ピザ生地空中回し名人のスゴ技は芸術の域です。近所の大力食堂のおばさんは満席のお昼時、キツネうどんとおはぎ1個、隣の席はカレーうどんに稲荷2個、その相席はなべ焼きにおはぎと稲荷1個ずつの同時注文を伝票も書かず厨房に伝え、会計時にハイ〇〇円と即答、店回しの達人はもはや尊敬の域です。

京都大学にも経理通の人、人事通の人、色々精通した人あれど名人・達人の域とは遠いものです。しかし、創立125周年超の1/3の間、全学の教職課程事務を裏方として支え続けているlegendが本学部には存在します(年齢不詳)。その科目は免許に使える、この科目は他学部で開講、平成〇〇年で免許法が変わると時代と学部の枠を超える生き字引です。

窓口回しも縦横無人、一張一弛、学生からは難攻

不落(?)。学生に苦言を呈したあと、社会に出て困るのに、良識ある教員になってほしいのにとブツブツと独り言が続き、legendの厚く、深く、温かい親心が覗きます。それは大力食堂のおばさんが夜勤明けのお客さんのキツネうどんの上のキツネを1枚増やし、クラブ帰りの高校生のカレーうどんのうどん玉を1.5玉にしてくれるような温かさです。AIは科目や免許法を教えてくださいが厚、深、温の温度調節はできません。卒業生が教員として活躍していると聞くと〇〇年頃の卒業生でxx専攻で…とこの時点ですでに神業です。そして続きは頑張ってるな～、そういえば先生に向いてたな～あの子と満面の笑みです。

今日もlegendの常に厳しく時に包み込むような窓口対応が続きます。そんな裏方の達人の匠の技を真似ることは至難の業ですが、厚・深・温の志が伝説の極意であることを肝に銘じ、教育学部発全学宛、教務心得「宝の伝説」として大切に語り伝えていきたいと思えます。



## オープンキャンパス2023

新型コロナウイルス感染状況に注意する必要があることから、2023年度オープンキャンパスは、昨年度同様、インターネットを活用して実施した。

齊藤学部長のご挨拶、学部概要と特色入試のライド説明、高橋雄介准教授、服部憲児教授による模擬講義、学生3名による「学部生からの応援メッセージ」の動画を2023年7月19日から2023年9月末まで特設サイトに掲載した。

また、高校生に向けて、本学部・研究科の学生に質問や相談が出来るオンライン相談会を実施した。



## 大学院・学部学士入学 入試説明会

2023年6月24日(土)にオンライン(Zoom)上にて、大学院及び学部学士入学入試説明会(コース別相談会)が開催された。

まず、服部憲児 教務委員長による入試ガイダンス(全体説明)を行い、その後のコース別個別相談会は、13時45分から15時25分まで実施した。

コース別相談会では、担当教員、大学院生相談員の学生と受験希望者との間で意見交換等が行われ、いずれの相談会でも受験希望者が熱意を持って参加していた。説明会後のアンケートでも、質疑応答が分かりやすかった、先生や大学院生に相談できる有意義で貴重な時間であったなどの感想が寄せられた。

京都大学大学院教育学研究科・教育学部  
Graduate School of Education Kyoto University (Faculty of Education)

**大学院教育学研究科  
・教育学部 入試説明会**

■ **入試ガイダンス(全体説明会)**

1. 大学院について  
2. 2024年度入学試験(大学院、学士入学)について  
2023年6月24日 12時30分～13時30分  
(リアルタイム配信)

■ **コース別相談会**

2023年6月24日 13時45分～15時25分  
(リアルタイム配信)



## 主な出来事 (2023.4.1 ~ 2023.10.31)

- 4月14日(金) 令和5年度 膳所高等学校 高大連携事業 京都大学特別授業(前期)  
総合・人間科学Aコース『ひとのこころとからだの行動遺伝学』  
高橋雄介 准教授  
京都大学吉田キャンパス
- 4月23日(日) 「私の教師生活——京都の綴方教師として」  
小宮山繁 氏(元京都市小学校教諭)  
共催: 日本教育学会近畿地区、  
教育実践コラボレーション・センター E.FORUM  
京都大学教育学部第1講義室・オンライン
- 5月26日(金) 講演会「ことば・思考の力をどう育てるか——社会の包摂性を高めるために」  
慶應義塾大学環境情報学部 今井むつみ 教授  
指定討論者: 松下佳代 教授、大阪大学大学院人間科学研究科 志水宏吉 教授  
主 催: 日本学術会議 心理学・教育学委員会 排除・包摂と教育分科会、  
日本教育学会 近畿地区  
共 催: 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
- 7月17日(月・祝) 連続研究会「『生きる』教育」(第3回) オンライン  
「ライフストーリーワークの視点を活かした治療的教育」  
大阪市立田島南小学校 別所美佐子 教諭  
主催: 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
- 7月21日(金) 連続研究会「『生きる』教育」(第4回) オンライン  
「『生きる』教育」と虐待臨床」  
山梨県立大学人間福祉学部 西澤哲 特任教授  
主催: 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
- 7月23日(日) 変動の時代の教育改革者たちに学ぶ  
——『時代を拓いた教師たちIII』オンライントークイベント  
共催: 神戸大学大学院人間発達環境学研究科、  
教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
- 7月25日(火) 高大連携事業令和5年度大学見学キャンパスツアー  
私立須磨学園高等学校  
南部広孝 教授  
京都大学教育推進・学生支援部棟1階 国際交流多目的ホール
- 7月27日(木) グローバル教育展開オフィス  
教育学研究科・教育学部留学生の交流会  
教育学部本館 第一会議室
- 7月30日(日) 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催  
第25回リカレント教育講座「心の教育」を考える——現代の子どもをめぐる“暴力”——  
京都大学百周年時計台記念館
- 8月18日(金) 19日(土) E.FORUM「全国スクールリーダー育成研修」  
共催: 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM、  
京大オリジナル株式会社  
京都大学吉田キャンパス
- 9月10日(日) 第26回研究科セミナー  
研究科の自己点検・評価委員会と学外研究団体・「教育史フォーラム・京都」との共催企画シンポジウム  
「新制大学における評価と統制に関する制度改革構想」  
キャンパスプラザ京都、オンライン
- 9月21日(木) 高校におけるデータサイエンス×探究を考える  
主催 秋田県立湯沢高等学校  
後援 京都大学国際高等教育院 附属データ科学イノベーション教育研究センター  
京都大学教育学研究科 教育実践コラボレーションセンター  
京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホール
- 10月26日(木) 27日(金) 教育実践コラボレーション・センター  
令和5年度福岡県立京都高等学校「京都研修」  
京都大学吉田キャンパス総合研究2号館  
服部憲児 教授

## 人事異動 (2023.5.1-2023.10.31)

2023 (令和5) 年6月30日 大江 将貴 研究員 (教育社会学) 事務補佐員 (教育社会学) 派遣職員 (人間・教育科学)	退職 任期満了 任期満了	2023 (令和5) 年9月30日 RAPPLEYE, Jeremy 准教授 (教育・人間科学) 事務補佐員 (教育認知心理学)	退職 任期満了
2023 (令和5) 年7月1日 事務補佐員 (教育社会学)	採用	2023 (令和5) 年10月1日 三澤 紘一郎 准教授 (人間・教育科学) 野口 寿一 准教授 (心理臨床学) 事務補佐員 (教育認知心理学) 派遣職員 (地域連携教育推進ユニット)	採用 採用 採用 採用
2023 (令和5) 年7月5日 派遣職員 (人間・教育科学)	採用	2023 (令和5) 年10月16日 梅村 高太郎 准教授 (臨床心理学) 派遣職員 (教育認知心理学)	昇任 採用
2023 (令和5) 年8月15日 事務補佐員・教務補佐員 (教育・人間科学講座・地域連携研究推進ユニット)	退職	2023 (令和5) 年10月24日 派遣職員 (総務掛)	採用
2023 (令和5) 年8月16日 張 潔麗 助教 (グローバル教育展開オフィス)	採用	2023 (令和5) 年10月31日 事務補佐員 (総務掛) 事務補佐員 (地域連携教育推進ユニット)	退職 退職
2023 (令和5) 年8月31日 高山 敬太 教授 (グローバル教育展開オフィス)	退職		

## 外部資金受入れ (2023.4.1-2023.9.30)

### 寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
対面およびサイバー文脈における攻撃性の機能差を測定する尺度の開発	一般社団法人 安心ネットづくり促進協議会	佐藤 万知
比較認知発達科学研究のため	高橋 俊一	明和 政子
戦後日本における大学受験の大衆化と日本型受験産業の展開	公益財団法人稲盛財団	藤村 達也
グローバル化する学校外教育をめぐる「影の教育」パラダイムの再考	公益財団法人 松下幸之助記念志財団	藤村 達也

### 受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
音楽養育環境による乳幼児の内受容感覚発達のメカニズム解明	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子
児童/生徒および教師を対象とした生理・心理機能 および食生活習慣との関連性の検証	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子

## 諸報

### 新任教員紹介



**三澤 紘一郎** 准教授  
所属：教育・人間科学講座  
専門：教育人間学、教育哲学、  
philosophical anthropology

人間を「内側」から理解することを目指して研究を行っています。多くの方と交流できることを楽しみにしております。よろしくお願いたします。



**野口 寿一** 准教授  
所属：臨床心理学講座  
専門：心理臨床学

10月より着任いたしました野口です。専門は心理臨床学です。一日も早く大学に慣れ、研究と教育に邁進したいと思います。よろしくお願いたします。



**張 潔麗** 助教  
所属：グローバル教育展開オフィス  
専門：比較教育学、高等教育学、高等職業教育

高等教育段階の職業教育とその提供機関の展開に関心を持っています。グローバルな観点から検討できればと思います。どうぞよろしくお願いたします。

## 教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を含め、ここに芳名を掲載させていただきます。  
(公開をご希望されない方については、掲載していません。)

※50音順 ※2023年9月末現在

石原 皓次      河合 初江      高木 枝美子      戸村 翔一      古谷 猛      前橋 由紀子      森本 洋介  
奥田 昌秀      四方 康子      武内 優和      廣瀬 直哉      ベイカー 浩子      森 裕充

### —未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、 成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みます—

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。

その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いします。

#### 基金の使途：

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。  
<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>



#### 編集後記

短い秋が去り、木枯らしが身にしみる季節となりましたが、コロナ禍が少し解けて、あらためて人と人との出会いと対話の大切さを想っています。冒頭の副研究科長・南部広孝先生の言葉にもありますように、創設70周年を迎え、長く刻まれた歴史の重みを感じて円熟味を増す研究科を目指したいと思えます。また、今号もフレッシュな先生や学生諸氏の言葉が寄せられました。私たちも瑞々しさを忘れない教育者、研究者でありたいと考えます。  
(高橋靖恵)

#### 表紙によせて

2023年7月27日にグローバル教育展開オフィス主催の留学生交流会が開催されました。今回は教育学部・研究科で学ぶ留学生・チューター・教職員が集まり、留学生が大学にどのような期待を持ち、また学生生活における課題や要望はどのようなものかについてグループディスカッションをしました。留学生は教育研究環境や先輩後輩関係に満足をしている一方で、他コースや他学部・研究科との交流が困難であることや、日本語による研究活動・学生生活の課題などが共有されました。短い時間でしたが話がつきることがなく、交流の場を設けることの意義を感じる機会となりました。  
(佐藤万知)



京都大学教育学研究科・  
教育学部広報委員会

委員長 齋藤 直子      教授(人間・教育科学講座)  
委員 高橋 靖恵      教授(臨床心理学講座)  
委員 藤間 公太      准教授(教育社会学講座)

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>



ガイドドッグペーパー  
当印刷物の用紙費用の一部は  
関西盲導犬協会に寄付されています